

韓国漁村社会の調査ノート

— 祭祀儀礼の変貌をみる —

Field Note: Transformation of the cult-life in Korea fishing communities

崔 仁 宅

近代化が村落社会に急激な変化をもたらし、それに伴う諸民俗事象が如何なる過程を経て変化と変容を繰り返してきたかは民俗学、民族学の重要な研究テーマの一つであった。このような変化には、特定の時期を境に急激な変化が進められるのと恒常的变化が持続的に行われる場合に分けて考えることができよう。両者とも外的要因に大きく影響されることはいうまでもない。民俗社会の直面したこれらの外部からの様々な挑戦に対して、変化することへの不安や不確定性を乗り越える力よりは、反復され安定を保とうとする力への依存が「昔からそうだった」彼らの生活体系を維持・継承する根源になっていた。なかんずく、村落レベルの祭祀儀礼の場合は後者の性格を色濃く反映している。つまり、反復・継承された祭祀儀礼の中核にあるのは「災因論/幸因論」であるので、余儀無き変化に直面した場合は、なおも儀礼自体の遂行をめぐる人々は選択に迫られるのである。本論では、韓国東海岸の幾つかの漁村の事例をとりあげ、調査報告と若干の分析を行い、祭祀儀礼の変貌の実態を探る。

キーワード： 過疎 年齢層の断層 民俗知識 変容・変化 村落祭祀

目 次

| | |
|------------------|------------------------|
| I はじめに | 4 大灘里の事例 |
| II 調査地の概況 | 5 菖浦里の事例 |
| III 祭祀儀礼の変化 | 6 金津1里の事例 |
| 1 東海岸における村落祭祀の概観 | 7 金津2里の事例 |
| 2 老勿里の事例 | IV むすびにかえて—過疎の問題と祭祀儀礼— |
| 3 烏保里の事例 | |

I はじめに

村落社会における変化と変容の問題は通時的に、そして恒常的に存在してきており、それが文化の動的側面を認知可能とする直接的な指標のひとつにもなっている。つまり、村落社会の変

化については、特定の時期を境に急激な変化が進められるのと恒常的变化が持続的に行われる場合に分けて考えることができよう。両者とも外的要因、例えば政策転換や経済状況の急変、戦争やそれに準ずる国の根幹を揺るがす歴史的な事件、大規模な天災地変や自然環境の急変などに大きく影響されることはいうまでもない。しかし、村落社会の変化をこのような外的要因のみに求めることはできない。19世紀に流行った「文化進化論」の説くところの未開社会の「停滞性」論理が個々の社会についての精緻な調査研究の前で否定されてきたように、個々の村落社会は様々な動態的装置を通して、自らの発展を成し遂げてきたし、外部からの刺激に対しても柔軟に対処してきていることがわかる。このような村落社会に内在された動態性の力学が変化・変容にも働き、維持・堅持にも働くのである。特に、今日のような様々な情報が大量に、それも迅速に与えられる状況下では、生活様式の均質化が相当進み、これらの均質化の中でそれぞれの村落社会がどのような独自の対応を示していくのかといった問題〔松崎 1992 : 15頁〕を追究していくことによって、村落社会に内在する動態性の全貌が浮き彫りになろう。

一方、「近代化」とともに押し寄せてきた社会・経済的变化が村落社会の恒常的变化をはるかに凌ぐ勢いで急激な変革をもたらしてきたことは論を待たない。その渦中で、民俗学者や人類学者のフィールドワークは村落共同体の諸形態が近代化の波に飲み込まれ、打ち壊れる前に諸民俗事象を「保存」ないしは「保護」することが急務であるとする「観察」と「記録」の時代を過ごしてきたが、その作業はなおも続けられている。なぜなら、外部からもたらされたあらゆる「知識」や「情報」が内的変化の触媒となって恒常的变化を促し続けているからである。

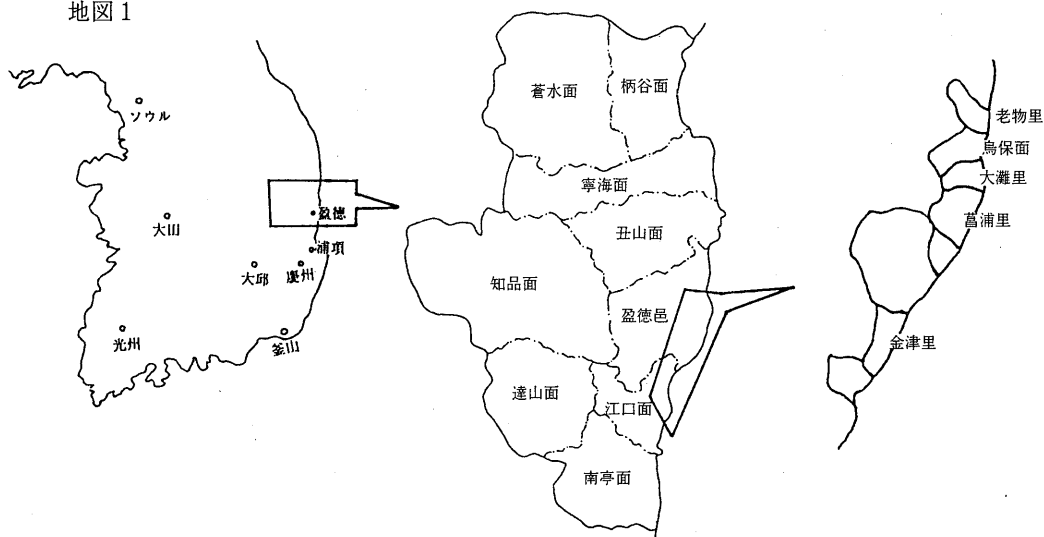
とりわけ民俗社会の儀礼生活においては、不変であるかのような装いをした、「昔から」の営みが、時としては微調整を、時としては大きな変革に迫られ、着実に変化してきており、それこそ「文化」なるものが生き物であることへの証明であろう。しかし、民俗社会の直面した外部からの様々な挑戦に対して、変化することへの不安と不確定性を乗り越える力よりは、反復され安定を保とうとする力への依存が「昔からそうだった」彼らの生活体系を維持・継承する根源になっていた。なかんずく、村落レベルの祭祀儀礼の場合は後者の性格を色濃く反映している。つまり、反復・継承された祭祀儀礼の中核にあるのは「災因論／幸因論」であるので、余儀無き変化に直面した場合は、なおも儀礼自体の遂行をめぐる人々は選択に迫られるのである。ホブズボウムのいう、半ば義務的な反復によって築きあげられた過去〔1992 : 10〕が彼らの儀礼生活を支える主な柱になっており、その礎には義務を怠った際の祟りや災いへの消極的な恐怖心が潜んでいる。大方の村人は変化を自覚している。このような変化に直面する村落社会の内面には、「昔からそうである」無意識的な伝統へ回帰しようとする保持・継承のベクトルと新たな状況の中で、変化・変容して適応して行こうとする相反するベクトルが働いているといえよう。両者の均衡を如何に保つか、まさに村落社会の自生力が問われているといえよう。本論では、韓国東海岸の漁村社会の幾つかの事例を報告し、若干の考察を行うこととする。

II 調査地の概況

盈徳郡は、慶尚北道の東北部に位置し、世界有数の製鉄所で知られる浦項（ポハン）市から国道7号線を北へ約50キロ上ったところにある農業と漁業の地域で、「ヨンドク（盈徳）デーゲー」（ずわいガニの一種）の名産地としても知られているところである（地図1参照）¹⁾。また、盈徳郡最大の漁港である江口には水産物加工工場や鮮魚販売所、刺身や海の幸の料理を専門とする食堂などが並んでおり、賑やかな雰囲気が漂う。漁港には、沿岸・遠洋漁業に従事する船舶の出入りも多く、慶尚北道の主な漁港の一つとして栄えている。近年の地方自治制の施行²⁾による、自治体主導の地域開発が積極的に進められており、盈徳郡も約53キロに及ぶ綺麗な海岸を利用した観光資源の活用に力を入れている。行政区域としては郡庁所在地である盈徳邑と八つの面を擁し、204の行政区域（法律で定められた最下部の行政単位、市邑部では、「洞」といい、面部では「里」という）で構成されている。1996年に刊行された、盈徳郡の広報誌である『'96自治郡政 盈徳』によれば、1995年12月31日現在の人口は、男27,928名、女29,625名で、合計57,553名、世帯数18,983になっている。また、同広報誌によると、1996年度の予算規模は、一般会計で、約707億ウォン（約70億円）になっているが、87%が国や道からの補助金で賄えられ、財政自立度は非常に低い。特に、1995年本格的な「民選自治時代」の到来により、各地方自治体ごとの開発と基盤整備の推進が目立つようになり、自治経営の健全化を計るため、躍起になっている。盈徳郡も「郡民本位の行政刷新」「農漁村所得増大」「観光開発の促進」「創意的自治経営」という郡政方針を掲げ、「盈徳総合開発3カ年計画」を樹立し、三思海上公園を中心とする海水浴場や海上レジャー施設を整備する観光開発事業や農工団地造成、漁村総合開発など開発のラッシュが続いている。しかし、これらの努力は始まったばかりで、可視化するまでには相当な時間が費やされると思われる。というのも、地方自治体主導の地域開発には、十分なノウハウが蓄積されておらず、成熟していない地方自治の諸活動ゆえに、スローガンだけが一人歩きする政治の論理が他の論理に優先される可能性があるからである。このような徴候は、選挙を意識した乱計画と乱開発による環境問題に飛び火し、各地でその対策に梃子摺っている様子が新聞誌上に盛んに報じられている。

一方、上記の人口統計を16年前の1979年『盈徳郡誌』による人口統計と比べてみると、男46,497名、女47,668名で、合計94,165名、世帯数19,682になっており、人口は実に約40%減にも及ぶ。後述するが、郡全体の人口流出もかなり深刻であるが、行政中心地から離れている村落社会における過疎化の問題はさらに深刻で、様々な影響を及ぼしている。この問題は村落社会の儀礼、生業、社会生活などにも大きく関わっているので詳しくは後述することにし、本報告では盈徳郡のうち、盈徳邑の老勿里、烏保里、大灘里、菖浦里と江口面の金津1里、金津2里の漁村の事例を中心に儀礼生活の変貌について若干の考察を行うことにする。

地図1



Ⅲ 祭祀儀礼の変化

1 東海岸における村落祭祀の概観

韓国における村落レベルの祭祀³⁾は、「堂祭(ダンチェ)」「洞祭(ドンチェ)」などと呼ばれる主に儒教の形式に則ったものと「別神祭(ビョルシンゼ)」「都堂祭(ドダクツ)」「豊漁祭(ブンオゼ)」などと呼ばれるシャーマン(巫堂ムーダン)による巫俗信仰を基盤とするものに大別される。前者は、一般的に「祭官(ジェグアン)」と呼ばれる一人若しくは複数の男性のみの祭祀遂行者によって行われるもので、祭官になれる人々は村落社会の決められた一定の条件を満たした者が選ばれる。その条件の内容は、地域によって様々であるが、死の不浄や血の不浄のない者であることが基本的な条件になっている。即ち、家族⁴⁾の中に死亡や出生と関わる事柄があつては祭官の資格はない。また、祭官に選ばれてからも様々な禁忌が課せられ精進しなければならず、祭祀の後も一定期間は吉事や凶事への参加は許されない。一方、後者の場合はムーダンと呼ばれる霊的職能者たちによるもので、年に数回行われる洞祭と異なって、数年に一度しか行わない。特に、東海岸地域では、「別神祭(ビョルシンクツ)」「豊漁祭(ブンオゼ)」などと呼ばれ、規模や予算などにおいて洞祭とは比べ物にならないほど大掛かりな祭で、現在も各地で行われている。

本論では前者の事例を中心に述べていくことにするが、この地域の洞祭の著しい特徴の一つとして取り上げねばならないのが祭神の性格である。「○氏基盤に○氏ゴルメギ」と表現される祭神がそれで、例えば、「金氏基盤に李氏ゴルメギ」というように姓を冠した複数の神が祭られている。ここで基盤とは、生活の拠りどころ、土地、畑や田圃などの意味であり、ゴルメギとは村を意味する「ゴル」と防ぐ、守護するなどの意味の「マギ」の複合名詞で、洞祭神のことであり、慶尚

道地方では、村落創建神、始祖神、守護神の観念を帯びており、このような「ゴルメギ」洞祭神は特に、東海岸地域に際立って分布している〔張 1990:144頁〕といわれている。つまり、「基盤」となる神はその土地に一番最初に住み始めた入郷祖の姓を冠した村落開祖神であり、村の守護神としての「ゴルメギ」神(地域によっては、「ゴルモック」「ゴルマック」などといい、「ハルベ(お爺さん)」「ハルメ(お婆さん)」と表現したりする)に同じく姓を冠し、この二位が洞祭の祭神になるのである。しかし、村によっては三位、四位の場合もあるが、基本的には二位の祭神が祭られている場合が多い。このような祭神の性格については、後述することにして、慶尚北道の盈徳郡下のいくつかの事例を紹介しながら考察していくことにする。

2 老勿里の事例

老勿里は江口から丑山間の海岸道路を挟んで内洞と外洞に分かれている。村落はさらに1班から10班までに細分され、1班から3班までが内洞、4班から10班までが外洞になる。村落は小高い山側(西)の方から海側(東)へと展開しており、海側の外洞は小さい湾の北側に小高い山の斜面を屏風のように家並みが立ち並び、刺身料理の食堂が何軒もあり、休日にもなれば、村外からの客の車で小さい港はいっぱいになる。

1972年の「全国民俗総合調査」事業による報告書によれば⁵⁾、男559名、女553名、計1,112名で、186世帯(世帯当平均人数5.9名)になっているが、1998年8月現在は、男198名、女221名、計419名で、165世帯(世帯当平均人数2.5名)になっており、26年間で半分以上の人口減になっている。しかし、世帯数においては、僅か1%程度の減に留まりながら、世帯当平均人数は半減以上という状態になっている。これは老人夫婦世帯が急激に増えたことへの反証でもある。このことは過疎の問題に加えて、高齢化と年齢層の断層というさらに深刻な影を村落社会に落としている。後述するが、伝承主体者として中心的な役割を担ってきた年齢層はすでに死亡もしくは高齢で、祭祀儀礼の細部にわたる内容については十分伝わっておらず、儀礼形式のみがやや形骸化した形で取りあえず伝承されてきていると言えよう。しかし、このような状態はすでに1970年代後半から始まっていたし、当時から祭祀儀礼の衰退は止むなしという危うい状況が非常に近いうちに到来するだろうという意見が支配的だった。こうした村人たちの話を理解すれば、村落レベルの祭祀儀礼が変容の過程を着実に歩んでいることを実態として認識することができよう。

1) 祭日

表1でも示したように、洞祭は年に4回行われるが、内洞の場合は、6月の祭祀がなく、祭祀も外洞が終わってから内洞の祭祀が行われるといい、そのため内洞は日取りが要らないという。また、旧暦(以下、祭日についてはすべて旧暦)の正月15日(正確には午前0時から)以外は、3月、6月、10月のそれぞれの月の一日に日取りを行い、大体2週間以内の日に祭日が決まる。

日取りに際しては、盈徳邑内の哲学館⁶⁾あるいは寺のお坊さんに、祭官の誕生日などとの相性を占ってもらい、日を決めるという。また、祭祀後の三日目には「サクチェ」といい。祭官三人だけが、乾きもの、酒、刺身ひと皿を供えて、夜10時頃祭堂で儀礼を済ませる。この他には、10年に1回「別神祭」が行われる。

2) 祭官

祭官の選出の時期については、1972年の調査資料の中で、張籌根の報告では、祭官3人(三献官)と供物を担当する「ドガー(都家という漢字を当てている)」1名の計4名を正月一日に老人たちの会合で選ぶ〔1990:151頁〕としており、さらにそれぞれの月の祭祀についての記述では、その月の一日に選出される〔1990:152頁〕となっている。また、同じ報告資料の「巫俗」の項目を記述した崔吉城によれば、正月5、6日頃「洞会(村の寄合)」⁷⁾を開催し、その席上で選出する〔1990:201頁〕となっている。筆者の調査では、それぞれの祭祀月の一日に選出するが、1990年代に入ってから祭官の成り手が中々みつからず、里長が一人で行った時もあったという。また、昔は正月の16日にある「大洞会(総寄合)」の際、その年の祭官を選出し、それぞれの祭祀を遂行してきたという話者もいる。しかし、現在は4回の祭祀ごと、それぞれの祭官(現在、基本的には3名だが、そのうちの一人は里長になる場合が多いという)を選出するが、当人の了解が得られれば、続けて祭官を務める場合もあるようである。ここで注目しておきたいのは、近年は祭官を引き受けてくれる村落成員がなかなかなく、村の代表者である里長の最大の任務の一つが、祭官選出になっているという事実である。祭官の手当てとして、1回一人当たり40万ウォン(約4万円)を支給し、「ガグアム」といって、岩海苔の採取権1区画を三人の祭官に与えても、皆固辞するという。このような事態を受けて、内洞の場合はすでに20数年前から祭官職の輪番制を導入しているとう。このような状況は、周辺の村々にも普遍的にみられる現象で、ほぼ全国的現象といつてよい。元来、神への奉仕者として日常的な生活から聖別され、分離と禁止によって選ばれるはずの祭官職が、日常生活への支障を来す様々な禁忌を伴う祭官の本質的な性格ゆえに、その役割を忌み嫌うという構造的矛盾を私たちは目の当たりにしている。

3) 祭神

内洞にも外洞にもそれぞれ「堂(祭閣)」をもっている。上記の張の報告によれば、両洞はもともと別々のむらであつて、<堂内部の正面に2枚の神主[位牌]を祀っており、向かって左側には“顕基主安氏神位”、右側には“顕洞防朴氏神位”と墨書されており>と記述され、<そして隣村の老内洞の堂にもやはり“顕安氏神位”と“顕朴氏神位”の神主があり、ここでも同じく“安氏の神を基盤にした朴氏コルメギ”という話が伝えられていた>〔1990:150頁〕と報告している。また、堂の正面には“崇祭堂”と書かれた扁額が懸けられおり、建物は海辺にあ

るとしている〔1990:151頁〕。しかし、この報告では外洞と内洞(上記の老内洞)が混同されている。なぜなら、現在“崇祭堂”という扁額が懸けられ、海辺にあるのは外洞の方であり、位牌も向かって左側に“顯朴氏神位”、右側に“顯安氏神位”となっているからである。もし、外洞/内洞という呼び方が逆であっても(実際、逆をいう話者もいた)、神位の書き方からしても両者は混同されているように思われる。いずれにせよ、両者とも「安氏基盤に朴氏ゴルモック」という共通の《双分神》が祀られている。また、「安」と「朴」という具体的な姓が付与された位牌が祭神として祀られているが、<伝説によれば、1200年前、この部落に安氏が入ってきて定住し、その後、朴氏が移住してきて子孫が繁盛するようになり、部落が発展していった。そこで、朴氏が死んで部落の祖先神として“コルメギさま”となったと伝えられ、“安氏の基盤に朴氏のコルメギさま”との言葉ができあがった>〔崔吉城 1990:200頁〕としている。しかし、現在は安氏は一人もいなく、堂の裏に安氏一族の墓のみがあるという。参考までに1992年の『盈徳郡郷土史』によれば、もっとも多い姓は金(68世帯)と李(19世帯)で、続いて朴(16世帯)、河(13世帯)の順になっている。村びとには、安氏と朴氏の祖先神という意識はほとんどみられず、<村の神であって、安氏と朴氏とは関係ない>といい、さらに<村の祖先であって、神ではない>という意見や<村の祖先が、この村を守ってくださるから神である>という意見など必ずしも一致した神観念は求められない。しかし、内洞の祭神はハルメ(お婆さん)、外洞の祭神はハルベ(お爺さん)と表現したり、あるいはその逆をいったり、朴氏がハルベ、安氏がハルメなども表現する。つまり、二位の《双分神》に対して、‘お爺さん’ / ‘お婆さん’ という人格を与えて認識しており、‘父’ / ‘母’ ではないところに祖先神の性格を垣間見ることができる。一方、男性/女性という基本的な原理が神格の基底に流れており、どちらかのむらに男性/女性原理という二元的象徴性を担わせているといえよう。祭祀遂行の内容から明らかなことは、何らかの系譜関係に基づく血縁組織による祭祀ではないので、必ずしも特定の個人を祀っているわけではなく、地縁原理による、村落開拓神への祭祀の性格が強いのといえよう。

4) 供物

先述したように、洞祭は主に儒教的形式に則って行われる。これは家レベルの儒教的祖先祭祀の形態と類似しており、供物の内容も類似しているといわれている。まず、供物をのせたお膳は基本的に三つである。安氏神位と朴氏神位の二つとその他の一つである。安氏神位、朴氏神位には、それぞれハルベ(お爺さん)、ハルメ(お婆さん)の夫婦分の供物が供えられるというインフォマントもいるが、そうでないというインフォマントもあり、今後の調査で明らかにすべきである。

一方、残りの一つのお膳のことであるが、①村の功労者たちのためのもの、②ここ一年間に亡くなった村人のためのもの、③昔からこの村に住んでいた六つの姓を表わして6組の匙と箸を置いたものといわれているが、祭祀の度に奉仕を怠らなかった廉氏というある婆さんのためのもの

も加えて、七つの匙と箸を置いたものだという説もあり、一致した意見は得られなかった。主な供物としては、餅、神酒、牛肉、三実果（ナツメ、栗、干し柿）、ご飯、汁ものなどが供えられる。現在はその内、三実果の代わりにその時の旬のものを使う場合が多いといい、また、洞祭の供物として豚肉は使わないというが、その理由についてはほとんど不明である⁸⁾。しかし、村落の構成員として亡くなった祖先たちのためであることは共通要素といえよう。このような意味で、祀られる祭神の性格を類推することもできようが、もともと非人格的な祭神に、後から何らかの影響によって、一定の人格を与えて認識するようになったのか、あるいは上記の①、②、③のような意見のごとく一定の人格を有する祖先神なのかははっきりしない。ただし、外洞の崇祭堂という祭閣は、棟札に「昭和十五季二月二日己卯（1939年：筆者注）十二月二十五日 未時立柱上梁」となっており、もともとは建物や位牌もなく、自然の石の前で祭りを行っていたという。このことから前者の解釈の方が自然であるように思われる。現在、旧の5月19日は、毎年「祭堂建築記念日」（竣工式が行われた日）として守られ、朝の10頃簡単な祭を行うという。また、祭堂の建立前までは自然石の前で神酒を造って農楽を演舞したり、祭官たちは、臨時につくった小屋の中で夜籠りをしていたが、今は祭堂建立3年後につくった「宿直室」とよばれるところで、供物の準備などを行う。

5) 祭官の禁忌

祭官になると毎日沐浴潔斎し、飲酒、喧嘩、性交、血の不浄、葬式やその他のすべての儀式などから離れなければならない。また、祭祀の三日前には自分の家の門に、左注連縄を掛けて不浄の進入を防ぎ、祭祀後に外すという。祭祀が終わった後でも、その年のうちには、吉凶事への参加を慎み、日常的な生活にも気を付けなければならない。また、祭官は正月の祭祀の時には、道ばたで会う知り合いと挨拶も交わさず、供物の材料を購入する際にも喪に服す商店は利用せず、値引きもしないというほど気を使ったという。しかし、近年になってからは、祭り後の禁忌期間が1～3ヶ月間と短くなっており、人によっては、葬式などの凶事以外のことについてはあまり気にしないという。また、禁忌の期間についても、長く守る人もいるが、ほとんどの場合は、なるべく早く日常の状態に戻ることを優先し、禁忌の期間や内容もかなり変化してきているといつてよい。

6) 飲福

それぞれの祭祀後の朝、供物と神酒を神と村人が共飲共食するという「飲福（ウムボック）」行事⁹⁾は早朝、放送で知らせるが、近年はあまり人が来ないという。近年のように生活が豊ではなかった時には、飲福にたくさんの人々が参加し、<ご馳走にありつける>といった意味もあったらしいが、近ごろは老人層を中心に少ない人数しかこないという。このような事情は他の村においても変わらず、神との共飲共食という本来的な意味はかなり薄れてきている。

3 烏保里の事例

老勿里の隣村である烏保里は、1998年8月現在、83世帯213名(男106名、女107名)の半農半漁の村落である。往時には、大きい船も12艘ほどあったが、現在は1ton、1.5ton、2tonの船がそれぞれ1艘ずつしかなく、漁業不振が続く。原因は過疎の問題に加えて、漁業の基盤施設が整備されなかったことや両隣村(老勿里、大灘里)と違って、岩海苔やワカメ取りができる地形を含まない海に面しているのも一因である。そのため、現在、防波堤の築岸工事(1998年9月末完成予定)が進められており、アワビ養殖などにも取り組んでいる。また、祭堂のすぐ隣に、安東の人が敷地を買って、魚の養殖場を営んでいたが、不況のあおりで倒産し、現在は粗造りの建物だけが残っている。

1) 祭日

表1で示したように、洞祭は正月15日(正確には15日の午前0時から)、3月、10月の3回行われる。老勿里と同じく、3月と10月の一日に盈徳邑内の哲学館にいて日取りを依頼するが、「ドガー」の生年月日と相性を占って、祭日が決まるという。殆どの場合、大体7~8日以内に決まるが、早い場合は、日取り依頼から三日目という場合もあるという。それぞれの祭祀は、夜の11時頃から12時頃の間で行われるが、1時間以内に終わるといふ。

2) 祭官

現在の烏保里における祭官は「ドガー」といわれる供物担当1名と「ジェグァン(祭官)」1名の2名で祭祀を行うが、以前は祭官が2名だったという。また、「ドガー」は、もともと供物担当の人を指していたらしいが、近年はどちらかといえば、祭祀について詳しい知識(例えば、供物の配列とか儀礼順についての)を有する責任者であるという認識をしているようである(ここでは総称して祭官とする)。祭官の選出時期は、日取りの4~5日前という話と正月16日の「大洞会」で選出するという話もあり、さらに詳しく調査する必要がある。しかし、「ドガー」と「祭官」の区別や近年の祭官希望者の減少などの問題と絡んで、村全体が柔軟に対応している可能性もある。また、烏保里の場合も老勿里と同じく、祭官の成り手が少なく、苦慮している。祭官になる50~60代の中には祭祀内容に詳しい人がいないので、すでに引退して良いはずの自分が祭官を引き受けていると嘆く話者もいるほどである。

一方、祭官の手当てとして、1998年現在、祭祀一回につき「ドガー」には20万ウォン、「祭官」には10万ウォンが支給されるという。

3) 祭神

山腹から海沿いに広がる村落と小川を挟んで、三年前に改修した小さい祭堂と供物などを準備する付属の建物がコンクリート壁の内側に並ぶ。祭堂の扁額には「烏保里神堂」と書いてある。

中に入ると、向かって左側に“烏保基址劉氏神位”、右側に“烏保城隍裴氏神位”と書かれた木製の位牌が安置されており、村人は「劉氏基盤に裴氏ゴルモックハルベ」と表現する。位牌の内容から劉氏が村落開拓祖で、裴氏は、韓国一般に広くみられる城隍信仰に基づく、村の守護神的存在であるかのように思われる。しかし、話者によっては劉氏をハルベ、裴氏をハルメという話者もいる。その他に、位牌に向かって左の壁に“史道城房”、右の壁に“水神城房”と書いた紙が貼ってある。前者が陸地で亡くなった人のためで、後者が海で亡くなった人のためという話者もいれば、後者は竜王神のことをいうという話者もあり、はっきりした情報は中々得られず、今後の調査に期待することにする。

4) 供物

供物を載せたお膳は、「クンサン（大きい膳）」四膳と「ザグンサン（小さい膳）」を10膳用意するという。前者は、夫婦の2組で、残りの10膳は亡くなった全村落民を意味するともいう。また、前者のうち二つは劉氏／裴氏＝ハルベ／ハルメの分で、残りの二つは竜王神のハルベ／ハルメともいわれ、一致した意見はない。もともと全部で24膳もあったらしいが、近年になって14膳に減らしたという。また、他の話者によれば、洞神のハルベ／ハルメの分として4膳と“吏（使という字を当てる人もいる）道城房”に2膳、“水神城房”に2膳という説もあって、今後詳しく調査する必要がある。供物は餅、ご飯、汁もの、魚、肉などとナツメ、栗、干し柿の「三実果」を供えるが、餅は「クンサン」のみに供えるという。供物などを含めた祭祀の費用は1回につき約40万ウォン（祭官の手当ては別）かかるというが、ほとんどが漁村契（村の漁業組合的な協同組織）から捻出するという。

5) 祭官の禁忌

祭官になると基本的には、祭祀後1年間は吉・凶事に参加してはならないとするが、禁忌を守る期間は当該年内となっているので、正月祭祀の祭官を務めた人はほぼ1年間で最も長く、10月祭祀の祭官を務めた人は2ヶ月間で最も短いという。昔の村の長老格の老人たちは非常に厳しく、これらの禁忌を厳格に守るよう求められ、祭官に選ばれると祭日前まで毎日、寒い冬でも海で身を浄めなければならず、夫婦が同じ部屋を使うことも許されなかったという。しかし、現在はそのような意識がかなり薄れてきているという。ある話者は、漁業も廃れ、人間も少なくなり、さらに約14年前に江口から丑山間の道路開通により、祭堂の脈が切れたので、ハルベさまの効力もなくなったから、みな守らなくなったと嘆いている。このような嘆きには、自文化の変化を主体的に解釈し、その変化の核心に潜む彼らの世界観に直に触れるという意味合いを含んでいるといえよう。

6) 飲福

飲福は翌朝6時30分頃、里長が放送で知らせるが、前述の老勿里と同じく、近年は参加者が少ないという。

4 大灘里の事例

烏保里から南へ峠を一つ越えたところにあり、1998年8月現在、55世帯116名(男56名、女60名)の小規模の半農半漁の村落である。約400年前に鄭英用という儒学者が村を開拓し、村落名を「香月」と名付けたが、約150年前、姜氏という人が住みはじめ、村に大きい池があることから「大灘」と呼びはじめたことが今の村落名の由来という〔盈徳郡 1992: 147—148頁〕。

1) 祭日

正月15日と10月の年2回である。正月15日は夜明けの午前1時頃、10月は夜の11時頃祭祀を行う。10月祭祀の日取りは老勿里、烏保里と同じく、一日に祭官の生年月日との相性を占って行うという。

2) 祭官

祭官は「ドガー」1名と「ダンサンジュ(堂山主という漢字を当てる)」1名の2名である。10月祭祀の場合は9月30日頃選定するというが、正月15日の場合は、まだ未調査である。祭官の資格は前述の事例と基本的に同じである。

3) 祭神

祭堂の中には、向かって左側に「鄭氏基址神位」、右側に「姜氏城隍神位」と書かれた木製の位牌が安置されている。里長の話によれば、祭堂には村で一番最初に亡くなられた方を祀っているのだという。つまり、この村は鄭氏が最初に住みはじめたが、後から入ってきた姜氏が先に亡くなったので、姜氏ハルベを祀る祭祀だという。しかし、現に鄭氏の位牌も存在するし、上記の村落名の由来などや、願い言葉も「鄭氏基盤に姜氏ゴルモック」と唱えるということもあるので、今後、詳しい調査が行われるべきである。

4) 供物

ナツメ、栗、干し柿の「三実果」は基本で必ず供えるという。その他、魚類は供えるが、肉類は使わないというが、理由ははっきりしていないらしい。供物のお膳は五つで、①ハルベのため、②亡くなった村の功労者たちのため、③50～60年前に伝染病(はしか)で亡くなった人々のため、④この村には神霊に憑かれた人々が多かったため、それを防ぐため、⑤野たれ死や事故死、水死した人々などのためのものであるという。1回の祭祀費用は約40万ウォンかかるというが、

世帯当たり5千ウオンを徴収し、足りない分は漁村契の資金で賄う。

5) 祭官の禁忌

祭祀後3ヶ月間は吉・凶事への参加は慎まなければならない。20年前までは約1年間であったが、そこまでする必要性はないという意見が支配的だったので今のような状態になったという。村の中心的な存在の一人であるある話者は、年寄りの人々が強調しなければ、若い人々は祭祀について全く無関心であるという。ただ、村に何かよくないことが起きると洞祭を怠ったからといわれるので仕方なくやっていると話している。災因論の実際をよく物語っている事例といえよう。

6) 飲福

先述の事例と大同小異である。

4 菖浦里の事例

前掲の『盈徳郡郷土史』によれば、新羅文武王時代(670年)に林慶業將軍の後裔が住み着き、その後、宋氏が入ってきたという[1992:149頁]由来があるが、現在、林氏と宋氏の家は1軒もない。表1の祭神の内容をみても分かるように、この村落はもともと二つの村落が何かのきっかけで一つになったように思われる。あるインフォマントは、三つの自然村が菖浦里を形成するようになったという。これについては祭神のところでやや詳しく述べることにする。1998年8月現在、210世帯、512名(男236名、女276名)で、本論で取り扱う事例の中ではやや規模の大きい村落である。半農半漁の村であるが、近年は高齢化とともに農業はほとんど行われず、自給自足の水準にも満たないという。現金収入の保障率が相対的に高い漁業の方が中心になっている。40代のある話者も、きつい労力の要る田んぼを耕して米をつくるより、一日漁に出かけた方がはるかに楽だし、うまくいけば、何ヶ月分の米を買える収入が得られるという。本論で取り上げる他の村落と違って、漁村契を法人化し、漁業についてはかなり本格的な取り組みが行われている。後でも少し触れるが、食習慣の変化や1988年オリンピック開催以来の車社会の到来による活魚輸送システムの改善により、刺身料理が急速に広まった結果、魚介類の換金性はとても魅力的である。最近、海岸の漁村のどこへ行っても必ず刺身食堂があるといっても過言ではない。夫の採ってきた魚を妻の経営する食堂で刺身料理として出すというパターンも定着し、刺身食堂を専業とする村落民も増えている。ちょうど10余年前と比べると、かなり立派なコンクリートづくりの家並みが立ち並び、目を見張るものがある。

1) 祭日

正月15日、5月5日、10月の年3回の洞祭が行われる。そのうち、5月5日の祭祀は山側にある「城隍堂」の竣工記念日としての祭祀なので海岸側の方は祭祀がない。また、10月の祭

祀は「別告祀」といい、豊漁と海上安全を願う祭祀になるという。

2) 祭官

主に供物を担当する「ドガー」1名と祭官2名で構成していたが、やはり人手不足で5～6年前から、祭官は1名になり、計2名で祭祀を行うという。また、山側と海側それぞれ祭官を選定するという。手当てとして一人当たり1回につき、約50万ウォンを支給するという。

3) 祭神

菖浦里全体としては「林氏基盤に宋氏ゴルマック」と祭神を表現するが、山側の「城隍堂」には、向かって左側に“基定祠靈蔚珍林公之神主”、右側に“洞關祠靈恩津宋公神主”と書かれた大理石製の位牌が安置されている。位牌には具体的な「本貫」が表記され、それぞれ、基盤を定めた祖先と村を開いた祖先の霊というかなり個性的な人格を持った祖霊を祀っているといえよう。しかし、現在の菖浦里には両姓の人々は居住していない。また、城隍堂に向かって右の方には小さい囲いの中に石が祀られており、「山神堂」というが、否定する人もいる。ただし、否定の理由ははっきりせず、由来についても明確ではない。もう一ヶ所、城隍堂から少し下ったところの山手の方に、コンクリート築の小さい高台があり、ここを「ゴリ(道の意)堂」といい、簡単な儀礼が行われるというが、由来についてはやはり明らかではない。一方、海側には海岸を走る江丑道路(江口～丑山間の道路)の下の海岸にコンクリート製の囲いの中に小さい石碑が立っている。向かって左側に“基定祠靈慶州李公神位”、右側に“洞主祠靈安東権公神位”と刻まれており、側面には“丁丑十月初二日豎碑”と刻まれている。インフォマントの話や石碑のつくりなどから、1937年に作製されたものと思われる。ちなみに、現在、慶州李氏の人は多数居住しているが、はっきりした系譜関係は認識されておらず、「村の神」として認識しているようである。一方の「城隍堂」は今から約150年前に建てたという話者もいるが、確認できない。

上記したように、山側と海側はそれぞれ異なる祭祀組織によって、儀礼が遂行されるが、山側の祭神をハルベ、海側の祭神をハルメと表現する。洞祭の際も、山側の祭祀が終わってから海側の祭祀が行われるという。また、村落のちょうど中間地点に位置する「マウル(ムラ)会館」を中心に、城隍堂のあるところを「ウエノムラ」、海側の石碑(祭堂ともいう)のあるところを「シモノムラ」と表現している。このことから、「ウエノムラ」の方が、「シモノムラ」より、儀礼的には優位に立っているように思われる。儀礼的的双分組織によってそれぞれの祭祀が遂行されるが、これはさらに、一方をハルベ、他方をハルメといった象徴的「双分神観念」で収斂していると思われる。

4) 供物

他の事例と大同小異である。

5) 祭官の禁忌

他の事例と大同小異であるが、最近には洞祭のある日も海上操業に出かける人々が増えてきたという。

6) 飲福

他の事例と大同小異である。

6 金津1里の事例

この村は盈徳郡江口面に属する村で、もともとは別々にあった二つの村落が何らかのきっかけで一つの村落共同体を形成してきたものだと思われる事例である。というのも、今の「マウル会館」の前周辺を境界に両村が別々であったという話者もあり、後述する祭儀の内容からこのような事実が認められるからである。つまり、祭祀、祭官、祭堂などといった儀礼の場面では、村落双分組織がそれぞれの祭堂を中心に活動し、日常的な社会生活の場面では一つの村落共同体としてまとまっているといえよう。

1) 祭日

この村は他の事例と異なって、正月祭祀は行わず、3月と10月の年2回祭祀が行われる。ただ、『盈徳郡郷土史』には、9月9日にも祭祀が「マウル会館」で行われると記述されているが〔196—197頁〕、現地調査では聞くことができなかった。日取りは前月の晦日に行う。また、数年に1回「別神祭」も行われるという。

2) 祭官

ドガー1名、祭官1名、祝官（祝文を読み上げる役）1名の3名で構成するが、①、②（表1参照）それぞれ選任する。

3) 祭神

①の祭堂の入り口には門があり、「恭愼門」と書かれた扁額が掛けられており、1968年旧暦4月7日建設と付記してある。祭堂には「金津神堂」と書かれた扁額が掛けられており、檀紀4257年（1924年：筆者注）9月13日建設と書いてあるので、この祭堂は74年前に建てられたことになる。祭堂の中には向かって左側に「洞社之神」、右側に「洞禊之神」と書かれた木製の位牌が安置されている。前者をハルベ、後者をハルメという。「許氏基盤に朴氏ゴルモック」というが、どちらの位牌が許氏あるいは朴氏の位牌なのかははっきりしていない。現在、許氏の家は1軒もないが、祭堂の裏の方に墓があるという。

②の祭堂は今から約50余年前に建てられたといわれているが、1997年補修・改築した。

ももとは祭堂がなく、今の祭堂の前の海岸沿いにあった大きい岩の前で祭祀を行っていたといわれている。祭堂の中には、向かって左側から右側へ、“従享西副神位” “至靈至明社主神位” “従享東副神位”と書かれた三つの木製の位牌が安置されている。ある話者は、“至靈至明社主神位”は「ゴルモックハルベ」で、村の西が山側で東が海側であることから“従享西副神位”を「ヤマノカミ」、 “従享東副神位”を「ウミノカミ」と説明している。このことも含めて、とりわけ位牌の内容からも「非人格神」的な性格が他の事例と比べてより強い印象を受ける。というのも、今までみてきた事例は位牌に「○氏基盤に○氏ゴルモック」といった双分神的存在の姓が具体的に記載されているのに対して、①、②や後述する金津2里（ただし、位牌は未調査）の事例では、自然神的要素が色濃く反映されているように思われる。①の位牌に書かれている“社禊”は、朝鮮時代に王府が人民のために祀っていた「土地の神」と「穀物の神」を意味するので、少なからずのヒントを得ることもできる。問題は、元来自然神的な性格の強かった村落の祭神に儒教などの影響が及んだ結果、現在のような形、つまり姓を冠した位牌形式になったとする推論を如何に論証するかである。しかし、残念ながら個々の事例ごとの正確な資料や情報を得ることが非常に困難な状況であるといわざるを得ない。

4) 供物

未調査

5) 祭官の禁忌

祭祀後の禁忌は、葬式や血の不浄を伴う凶事には半年間は慎まなければならないが、結婚式や祝い事には3ヶ月後から参加できるという。

6) 飲福

元来、儀礼集団の全構成員が参加できる飲福も①、②それぞれ別個に行う。

7 金津2里の事例

この村も江口面に属しており、江口から北へ車で約10分のところにある。生業形態は半農半漁の村であるが、近年になってからは他の事例と同じく、過疎と高齢化が原因で農業は自給自足の水準にも満たず、漁業の方が盛んである。

1) 祭日

正月15日、5月端午、9月9日の年に3回行われる。この他に、約10年に1回、10月に大規模な「別神祭」が行われる。

2) 祭官

ドガー1名、祭官2名であったが、今は祭官が1名になっている。ドガーはもともと供物だけを担当していたが、近年は人手不足で祭祀責任者的な役割を果たすという。祭官の選定は祭日が決まっているので、その都度、約1週間前に行うという。ただし、ドガーは続けて1年間務める場合が多いという。手当てとして、ドガーは年間50万ウォン程度で、祭官は1回当たり10万ウォンが支給される。しかし、金を幾ら払っても祭官に成りたがらないので、困っているという。そのため、祭官になれる資格も緩め、例えば、喪主だった人の場合は、忌み明けから3年が経過しないといけなかったが、近年は1年過ぎれば務めるようになっているという。

3) 祭神

残念ながら祭堂の位牌については、様々な理由で未調査であるが、「安氏基盤に金氏ゴルモックハルベ」と祭神を表現する。この村にも祭堂は2ヶ所ある。「霊明堂」という名前がついた①は「上の堂」、「第一祠堂」という名前がついた②は「下の堂」といわれている。両方とも「○氏」という姓を冠した位牌はないとのことであるが、確認できなかった。この他にも海岸で「竜王神」のための祭祀があるという。昔は「上の堂」→「竜王神」→「下の堂」の順で祭祀が行われたが、現在は「上の堂」→「下の堂」→「竜王神」の順になったという。①については、「東神」「ゴルモックハルベ」「西神」の三位が祀られており、「東神」は山と関連がある神、「西神」は海と関連がある神であるという情報は一応得ているが、確認することはできなかった。

4) 供物

二組一つの膳（夫婦の意味で）を①には3膳、②には1膳供えるという。また、「竜王神」祭祀の時は、7つの簡単な供物を用意し、海に流すという。供物は、ご飯、大根の汁もの、魚類、三果実、塩で味付けした大根の煮付けなどを用意するが、肉類は使わないという。

5) 祭官の禁忌

祭官に選出されると、祭祀の3～4日前から家の門に注連縄を掛けて、精進しなければならない。祭祀後は、1年間は吉・凶事への参加は慎まなければならないが、本人の意志如何に関わっているという。ある話者は、自分は酒も飲むし、犬肉も喰うから祭官にはなれないとしながら、過去において、祭祀が終わって間もないのに豚の屠殺に関わったある祭官が病気で倒れたり、その他にも禁忌を守らず、祟る人たちをみてきたので祭官には中々なれないという。

6) 飲福

他の事例と大同小異である。

表1 慶尚北道盈徳郡における洞祭の祭神

| 村落名 | 祭 神 | 祭 日 | 備 考 |
|------|--|-------------------------------|--|
| 老勿里 | ‘安氏基盤に朴氏ゴルモック’ ・位牌 ①内洞 顕基主安氏神位 顕洞防朴氏神位 ②外洞 顕 安氏神位 顕 朴氏神位 | 旧正月15日、 旧3、6、10 月の吉日日取り | 内洞はハルメ、外洞はハルベ。安氏がハルメ、朴氏がハルベ。安氏がハルベ、朴氏がハルメという説があるが定かではない。 |
| 烏保里 | ‘劉氏基盤に裴氏ゴルモックハルベ’ ・位牌 烏保基趾劉氏神位 烏保城隍裴氏神位 | 旧正月15日、 旧3、10月の 吉日日取り | 史道城房、水神城房と書いた紙製の位牌が両側に張ってある。劉氏はハルベ、裴氏はハルメともいう |
| 大灘里 | ‘鄭氏基盤に姜氏ゴルモック’ ・位牌 鄭氏基趾神位 姜氏城隍神位 | 旧正月15日、 旧10月 | 供物の膳は五つ備える |
| 菖浦里 | ‘林氏基盤に宋氏ゴルマック’ ・位牌 ①山側 (城隍堂) 基定祠靈蔚珍林公之神主 洞闢祠靈恩津宋公之神主 ②海岸側 (石碑) 基定祠靈慶州李公神位 洞主祠靈安東権公神位 | 旧正月15日、 旧5月端午、 旧10月 | 旧5月端午の日は城隍堂竣工記念日としての祭神なので、②は祭祀なし。旧10月の祭神は「別告祀」といい、豊漁を願う祭祀という |
| 金津1里 | ① ‘許氏基盤に朴氏ゴルモック’ ・位牌 洞社之神 (ハルベ) 洞禊之神 (ハルメ) ② ‘安氏基盤に南氏ゴルモック’ ・位牌 従享西副神位 至靈至明社主神位 従享東副神位 | 旧3、10月の 吉日日取り | ①をハルベ、②をハルメともいう |
| 金津2里 | ‘安氏基盤に金氏ゴルモックハルベ’ ・位牌 (未確認) ①靈明堂 東神 ゴルモックハルベ 西神 ②第一祠堂 天下將軍神位 (?) | 旧正月15日、 旧5月端午、旧 9月9日 | 位牌については未調査 |

以上の事例から幾つかの考察が可能であるが、まずは、祭神の性格と関連して若干の考察を行ってみよう。村山智順〔1937: 232—238頁〕は祭神の性格を、何らかの人格を有する「人格神（歴史的な人物）」と「非人格神（自然神）」に分類し、祭神に対する由来伝説の少なさに驚きを隠さず、僅かな由来伝説も大体似通っていることを指摘している。このことから、前者は全国的な事例からすると極めて稀であり、520余の事例のうち400余の事例が祭神と村落民との社会関係あるいは人格関係のない「非人格神」であると記述している。また、人格神として認められる例として、①朝鮮社会の開拓者と伝えられる者、②村落の開祖としてまつられる者、③村落民を保護救済した者、④その土地において義烈名拳ある者、⑤その土地に滞留、通過した貴人の風を慕ってまつる者、⑥特異の行為功業のあった者、⑦その土地に縁のある偉い人というべき者、⑧哀れな者などを挙げている。このように、祭神の性格を二大別する趣向は韓国の村落祭祀研究においてよくみられる。例えば、朴桂弘はく堂神（洞神：引用者注）の中には、様々な種類の神がいるが、大きく分けて、自然神と人格神に分けられる。自然神には山神、水神、土地神、城隍神、方位神、動物神、風雲雷雨神などがあり、人格神には開拓神、英雄神、教化神などがある〔1993: 9頁〕としており、分類上の立場からすれば、○氏という具体的な人格を表わす位牌が祭堂に祭られている東海岸地域の洞神は人格神類型に属すといえよう。しかし、祭神と村落構成員との有機的関連が由来伝説の形で現れない形態を取っていても、伝承上の人物は必ずしも現存の村落構成員と明確な繋がりや系譜関係を有するものではない例が殆どである。この点、崔吉城もく例え、村落の神が特定の氏族の始祖神的な神話や伝説に裏打ちされていたとしても、その神が特定の氏族のための神ではなく、氏族を超えた村全体のための存在である場合が常例で、朴氏、金氏というのは人格神（神に人格を与えた：引用者注）を意味するに過ぎず、氏族の始祖神を意味するものではないとし、村落祭祀が「血縁や系譜原理」ではなく、「地縁原理」に基づいて行われているからだとしている〔1989: 169—170頁〕。また、前掲の朴桂弘も同じ論文の中で、もともと特定氏族の祖先神であったものが村落の開拓神として地域の共同神として祭られるようになったのだと理解している〔1993: 9—13頁〕。問題は祭祀遂行主体たる村落社会の成員たちは、例え、それが非人格神であっても、その祭神に対して一定の人格を与えて認識している事例は少なからず存在している。つまり、祭神の性格については、祭られる側の神格の側面を他者がどのように認識するかという分析的な立場と、祭る側の認識と表現システムの相違という違った側面が内在しているということである。村山自身もく部落祭の対象たる祭神が多くは自然力を神視したもの（山川神）、或は生活本拠の守護防衛の為に崇拜せられるもの（城隍神）、又は悪疫の招来者と考へられるもの（癘疫神）と云ふが如き一般的性質を有し、その本体よりも寧ろそのはたらきに崇敬の重点が置かれて居るものであるから、部落祭の要求するところが満たされるならば如何なる神でもよい訳であり、従って部落民と何等か特殊の因縁関係ある具体神でなくても差支なきが為であらう（傍点引用者）と述べているように〔1937: 127—128頁〕、洞祭遂行の中心には村人たちの「総体的な願い」が揺るぎなく構えられており、

神を観念する彼らの世界観は懇願的である。だから、村落社会の世界観は私たちの要求する整然とした理解とは異なる彼らの「論理」、つまり、自分たちの願いが叶えられ、庇護を受けることのできる神、それこそ彼らの最大の関心事であるという論理を無意識的にも意識的にも持ち合わせているので、人格／非人格、女性／男性といった神格は、他者への表現（あるいは自分自身たちへの）のための説明体系の一端を成すだけである。現地の人々は、研究者側の質問に適格な答えができない場合は「昔からそうであった」という答えに正統性を与えている。つまり、「古い」＝「伝統」＝「正当性」の図式は現地の人々にもっとも普遍的に認知されている「説明体系」かも知れない。もちろん、これらの説明体系は必ずしも観念体系に先行するものではなく、故に、変わりにくい観念体系をより変わりやすい説明体系の中から醸し出す作業は容易ではないのである。

一方、祭堂や位牌といった「神体」の変遷について、張籌根は①もともと「神堂」と「神体」を兼ねていた堂木に、②小さい建物の祭堂が出現し、「神体（神木）」と「神堂（建物）」が分化し始め、③そのうち「神堂（建物）」が大きくなり、神木は老朽してなくなるか、次第に比重が小さくなり、祭堂の建物との関連で新しい需要に伴う「神体」（神竿、神鈴、神旗、巫神図、神位牌）が分化形成された>〔1982：350頁〕と主張している。この見解は、上述の幾つかの事例、つまり、もともとは岩や石、神木といった「自然神」の前で祭祀を行っていたという事実からして、ある程度当を得ているといえよう。つまり、位牌の出現と「○氏の基盤に○氏のゴルモック」という祭神の性格には一定の因果関係があるように思われ、もっと大きな意味では、儒教と基層信仰との影響関係があるように思われる。

IV むすびにかえて—過疎の問題と祭祀儀礼

村落レベルの祭祀儀礼は着実に変化の道をたどっている。その動因として、まずあげねばならないのが儀礼遂行者の高齢化と後継者不足という村落社会一般の現象である。1997年韓国統計庁刊行の『韓国統計年鑑』44号によれば、6大都市の人口が約2133万人で、全国4460万人の約48%にのぼり、中小都市部の人口まで合算すると実に75%以上が都市部に集中するという極端な分布をみせている。このような現象は韓国経済の高度成長期にあたる1970年代後半から80年代にかけて集中的に見られ、今日においてはやや減速はしているものの小幅の都市部への人口移動は続いている。例えば、本論でとりあげてきた慶尚北道盈徳郡は、1979年（『盈徳郡誌』による）現在、94,165名の19,682戸（戸当たり平均人数は4.8名）であった人口に対し、1995年の統計では、51,288名、18,165戸（戸当たり平均人数は2.8名）と46%の人口減（戸当たり平均人数は42%）となり、15年の間にほぼ半減するというような状況である。当然、都市部への人口流出は若い世代が中心なので村落社会の高齢化はかなり進んでいるといえよう。例えば、1995年統計によると、60才以上の人口の全人

口に占める比率が全国平均で0.9%であるのに対し、都市部が0.7%、実質的な村落社会がほとんどである面単位の部が実に21%にも達していることをみても、村落社会の高齢化は都市部や全国平均をはるかに超える勢いである。しかし、実際はこのような統計上の数字以上に行政中心地から離れている村々の高齢化はもっと深刻な状況にある。例えば、同じく盈徳面の老勿里という村を例にとってみると、男198名、女221名のうち60才以上が200名近くになっており、総人口に占める割合は50%に肉迫している。この過疎化の問題は幼・少年層、若年層、中年層、老年層との間に著しい不均衡を生じさせ、村落の諸社会生活に大きな影響を及ぼしている。特に、祭祀儀礼の指導的役割を果たし、文化事象の主な伝承主体であった老年層の死亡とともに、年中行事の形骸化や縮小・消滅が目につくようになった。実際、村落レベルの祭祀儀礼について、調査者側の質問に的確に答えてくれる「全知」な〔渡辺 1990〕キー・インフォーマントに出会うのは幸運なできごとに属する。もっとも「民俗知識なるもの」の伝統的正当性について、もっと議論されるべき余地を残してくれたという感を否めない。特に、この夏の現地での聞き取り調査ではもはや従来の方法論や視角だけでは「民俗誌的な復元」は困難であることを痛感したのである。なにしろ、無文字社会に比類するほど記録や文字による情報が乏しい韓国村落社会における調査経験を踏まえても、かつて経験してきたこと以上の労力が必要になってきたとって過言ではない。これには村落レベルの祭祀である「洞祭」の帯びる構造的な性格とも無縁ではない。つまり、厳しいタブーが課せられる「祭官」の資格は限られたごく僅かな人間にしか与えられないし、その厳しいタブーの故に気持ち良く自ら申し出る人は極めて稀なケースである。これらの厳しい条件や禁忌は、祭祀自体の基底に流れる「聖性」の具現といった祭の根源的性格究明への取り組みの側面と同時に、過疎化や伝承主体者たる村落構成員の成層間の不均衡による祭祀の形骸化といった側面にも大きなインパクトを与えている。聖別され、分離と禁止の実践を通して儀礼の遂行が行われるので、限られたメンバにしか経験的知識が蓄積されない。このような「洞祭」の構造的な性格にも関わらず、かつてはこれらの大役を演じてきた村の長老たちは現在の何倍もの存在し、伝承主体の層が厚かった。また、そのような状態（「昔からそうであった」ように）は続くものだと思われていただけに私たち調査する側の憂慮とは裏腹に民俗社会の変貌ぶりは両方に戸惑いを与えているのである。祭祀儀礼について、断片的な知識が途切れ途切れ村びとたちに刻印されており、それらを一定の方法論を用いて再構成するのが人類学者の最初の仕事であることは言うまでもない。そして、そのような断片的資料を研究者側の技量を駆使して組み立てていっても必ず「ズレ」は出てくる。問題は昨今において、上に述べたような伝承主体層の急激な減少とそれによる民俗知識の不均衡が進んだ結果、核心的な部分が欠落する頻度が非常に高くなってきているということである。伝承主体層の厚い薄い問題は民俗事象の復元や分析の正確度において質的な偏差をもたらしかねない。もちろん、このような「変化」それ自体も含めた研究活動が私たち研究者に与えられた使命であることは間違いない。なぜなら、それもそれで村落社会のありのままの姿であるからだ。しかし、村落社会の変動論を追究する場合でさえ、個々

の社会が置かれている歴史的、生態的、社会経済的諸背景は十分考慮しなければならない。特に、pre-situationを踏まえることによって変動論や文化動態論的なアプローチが可能であることを勘案するとやはり精緻な調査資料を求めることは避けられない。その基礎となる資料収集に文字・記録情報からのデータを得られない状況では、現地におけるインフォーマントに頼るところを決して過小評価してはならない。例えば、東海岸の村落祭祀の特徴の一つとして挙げられる「○氏基盤に○氏ゴルメギ」という「双分神」的な祭神の性格を究明する際、神観念や世界観解析とともに個々の村における村落形成史の把握が欠かせない。度重なる村落の併合・分割によって引き起こされるコミュニティの組み換えは諸文化事象の大小の伝播・変容の影響を受けざるを得ない。併合に伴うmajorとminorの関係(色んな意味で)の中で、コミュニティ内部の力学にも大きな影響を与えるだろうと思うからである。

一方、人口の過度な流出による世代間人口層の不均衡は生産人口の不均衡も招き、諸生活に大きな変化をもたらしたが、このような人口の都市部への流出は単に両社会の断絶を意味するのではなく、人間ネットワークの拡張や社会生活における都市化という文明生活の均質化がもたらされた。T.V.、冷蔵庫、電子レンジ、電気釜などの家電製品の普及率は都市部とさほど変わらない。特に、道路網の整備や88年ソウルオリンピックを境に到来した車社会の普遍化は(自家用の乗用車登録台数:1990年約190万台であったのが1996年には約670万台に上り、約3.5倍)あらゆる場面で変化をもたらしている。時間的、距離的短縮以上の都市部と村落社会の距離を縮めている。電話の普及、さらには無線電話(携帯電話とPCS-PHONE)の急速な普及、冷凍設備を備えた活魚車の普及による魚類の商品性の増大などは、都市部と漁村部の様々な「格差」つまり、所得格差、生活格差、インフラ格差、情報格差の是正に少なからずの役割を果たしているのも事実である。

<付記>

本論は、宮崎学術振興財団と1998年度文部省在外研究の助成を受けて作成されたものである。記して謝意を表する。

註

- 1) しかし、盈徳邑の一部と五つの面が東海岸に面しており、残りの三つの面は内陸部の農村地帯になっている。その結果、純農業の割合が漁業もしくは半農半漁より相対的に少ない。
- 2) 1961年、朴正熙による軍事革命以来中断されていた地方自治体制が約30年ぶりに復活し、1991年3月26日には、郡議員選挙、続く6月20日には市道議員選挙が実施され、これまでの中央集権的な行政システムから地方自治の扉が開いた。しかし、肝要の地方自治団体長はまだ中央政府からの任命で、住民の直接選挙による地方自治団体長の出現は金泳三大統領時代に入った1995年6月になってからである。以来、本格的な地方自治の時代を迎えて、

- 従来の「君臨する地方行政」から「選挙民を意識する行政」へと様変わり、役場の窓口業務のサービスぶりは筆者にも戸惑うほどのものであった。
- 3) 韓国の村落祭祀については、植民地時代に朝鮮総督府による全国的規模の調査が行われ、『部落祭』(1937)が刊行されている。植民地政策の遂行のための調査報告書とはいえ、資料的価値は高い。このほかに、朴桂弘1982『韓国の村祭り』国書刊行会、近刊では、1997金宅圭『韓国農耕歳時の研究』下巻、第一書房、拙著1998『伝統社会』『ハンドブック韓国入門—ことばと文化』東方書店を参照されたい。
 - 4) 家族と一言でいっても影響を及ぼす範囲や内容などについては地域によって異なる。
 - 5) この報告書は『韓国の民俗大系—韓国民俗総合調査報告書—』というタイトルで日本語に翻訳され、1990年国書刊行会で発売されている。
 - 6) 陰陽五行説や星座、風水地理説などについての知識を有した者が、占いや日取りなどを専門に行うところ。
 - 7) 「洞会」「大洞会」などは村落生活の運営を話し合う自治会議である。詳しくは、金宅圭〔1997:161—170頁〕を参照されたい。
 - 8) しかし、崇祭堂の隣にある「ジャンスナム(長寿の木)」と呼ばれる神木には個人的なレベルでの願いごとのために、豚の頭を供える場合はあるという。
 - 9) 直会(なおい)、神々と人々がともに楽しむ宴会の形式〔金宅圭 1997:163頁〕。一般的な祭祀儀礼の順は、まず、祝官による祝文の読み上げ、献酒(初献、亜献、終献の3回)と拝礼、焼紙、飲福で構成されている。
 - 10) 「観念体系」と「説明体系」の関係については、拙著1998a「民俗方位観をめぐる覚書—沖繩の事例を中心に—」を参照されたい。
 - 11) この数値は韓国統計庁刊行『韓国統計年鑑1997』第44号による、五年に一度行われる人口センサスに表われる数値であるが、前記の盈徳郡の広報誌とはかなりの開きがある。しかし、細かい数値の場合は、地元の統計の方がより正確であるように思われる。

参考文献

エリック・ホブズボウム テレンス・レンジャー(編) 前川啓治 他(訳)

1992 『創られた伝統』 紀伊国屋書店

金宅圭

1997 『韓国農耕歳時の研究』上、下 第一書房

張籌根

1982 「韓国の神堂形態考—神堂・神体・神壇の分化についての考察—」金宅圭・成炳禧(共編)『韓国民俗研究論文選』I、344—371頁、一潮閣(韓国語)

韓国漁村社会の調査ノート (崔 仁宅)

- 1990 「部落及び家庭信仰」竹田旦・任東権(訳)『韓国の民俗大系』4慶尚北道篇、143—168頁、国書刊行会

崔仁宅

- 1998a 「民俗方位観をめぐる覚書—沖縄の事例を中心に—」大胡欽一他(編)村武精一教授古稀記念論文集『社会と象徴—人類学的アプローチ—』15—29頁、岩田書院
- 1998b 「伝統社会」松原孝俊(編)『ハンドブック韓国入門—ことばと文化—』214—229頁、東方書店

崔吉城

- 1989 『韓国民間信仰の研究』 啓明大学校出版部(韓国語)
- 1990 「巫俗」竹田旦・任東権(訳)『韓国の民俗大系』4慶尚北道篇、169—247頁
国書刊行会

朴桂弘

- 1982 『韓国の村祭り』 国書刊行会
- 1993 『比較民俗学—韓・日民俗の比較を中心に—』 蜚雪出版社(韓国語)

松崎憲三

- 1992 「民俗の変貌と地域研究」『日本民俗学』190、14—26頁、日本民俗学会

村山智順

- 1937 『部落祭』朝鮮総督府(1992年韓国の民俗苑という出版社から復刻版が出ている)
- 盈徳郡誌編纂委員会(編)

- 1981 『盈徳郡誌』 盈徳郡(韓国語)

盈徳文化院

- 1992 『盈徳郡郷土史』 盈徳郡文化院(韓国語)

盈徳郡

- 1996 『'96自治郡政 盈徳』 パンフレット(韓国語)

渡辺欣雄

- 1990 『民俗知識論の課題—沖縄の知識人類学—』 凱風社

